

南相馬市長が語る 福島第一原発事故の悲惨さ

「原子力防災講演会」

9月27日、福島県南相馬市の桜井勝延市長を講師に招き、「福島第一原子力発電所での事故を振り返り、原子力災害や現地での生活」をテーマに原子力防災講演会が開催されました。その講演内容についてお知らせします。



震災後の区域（平成23年4月）

東日本大震災から5年半が経過。東京以西の方々は、福島第一原発事故は既に収束し、その被害も解消されていると感じているのではないのでしょうか。

福島県南相馬市では、居住制限区域と避難指示解除準備区域が解除されたのは、事故から5年4カ月が経過した今年の7月12日です。

警戒区域に設定

福島第一原発事故により20キロ圏内は平成23年3月12日に避難指示が出され、4月22

一原発1号機が爆発しました。我々は爆発したことを知りませんでした。警察無線による爆発情報により、すぐ避難指示、屋内退避を指示しました。ところが、爆発の事実を確認できないとの報告を受け、屋内退避を解きました。

しかし、午後5時過ぎのテレビ報道で建屋が無いことを確認しよう一度、屋内退避を指示したのでした。

情報が入ってこないだけでなく、屋内退避の指示以降、物資や灯油なども届かなくなりました。入院患者さんを救う酸素さえも調達が困難となりました。

30キロ圏内には、物流トラックが全て入ってこなくなったのです。

県から南相馬市に支援物資を届けると聞き、到着を待っていたら良いかと思つたところ



①牧之原市のい〜らで福島第一原子力発電所事故の悲惨さを語る桜井勝延南相馬市長
②③いまだに除染作業が続けられている福島県南相馬市内の様子



ろ、約50キロ離れた川俣町に取りに来いとのことでした。ガソリンは何とか郡山で調達できるようにになりましたが、運転手がいませんでした。ローリー車と運転手、危険物取扱者の資格を持った人を何とか探し出し、取りに行ってもらいました。

必要としている物資があつても、「汚染」という言葉により全ての人が「汚染地域には入りたくない」となつてしまつてしまいました。

新聞も市役所に届いたのは5月になってからです。市役所にドサツと置かれ、そこに市民が朝から並んで新聞を取りに来る状況でした。

原発事故による差別

また、30キロ圏外の地域では県や日赤の義援金を受けられませんでした。同じ南相馬市内であっても、国の線引きにより義援金さえも受けられない人と受けられない人に区分けされました。

私は同じ扱いをすべきだと考えて財政調整基金（市の貯金）を取り崩して、義援金や見舞金として約8億6000万円支払いました。この金額は、基金の半分以上です。

情報や物資が全く届かない

平成23年3月12日、福島第

「あの人はお金がもらえる。私はもらえない、なんでだ。市長は住民を差別しているのか」と言われます。差別したいと思う市長はどこにもいません。

地域は違和感だらけに

そして、仮設住宅に住む高齢者の皆さんは、「市長、私を助けてくれ」と話し掛けてきます。

市役所には「地域のセキユリティや弱い弱者のための交通対策」の要望や、「医者がないところへ帰れない。大型スーパーがなくなり買物できないから帰れない」などの話が、毎日のように届けられました。

国が進める原子力政策によつて起きた原発事故は、家族をばらばらにし、今までのコミュニティをなくし、住民の心をかき乱し、避難によつて命が失われ、救えたはずの家族も救えなかつた焦りという立ちが、市役所に向かってくるのです。

平成27年8月11日に薩摩川内原発が再稼働

なぜ、月命日の8月11日に

清々しい生活に

原発立地地域は真っ暗で、東京の六本木は夜中じゅう灯りがついています。何で電力の供給地だった地域が真っ暗なのでしょう。

東京の皆さんには「あなたたちの笑顔を支えてきたのは誰なのか」と考えてほしいです。

まずは身近な所で節電をし、無駄なエネルギーを使うことなく清々しい生活に戻ること、一考ではないかなと思います。